

日本における幼児期からの国際教育への課題と展望

ー幼児向け国際理解教育ワークショップの取り組みから考えるー

川崎 徳子

Challenges and Opportunities for Intercultural Awareness Education from Early
Childhood in Japan

Reflections on an Intercultural Awareness Workshop for Young Children

KAWASAKI Tokuko

(Received September 28, 2018)

はじめに

近年、高度な情報化社会により社会の変化のスピードが加速するとともに、世界のグローバル化や流動化など、子どもを取り巻く生活環境、社会環境とそこで暮らす人と人との交わり方も明らかに変わってきている。こうした社会の変化に立ち向かいながら、子どもたちが未来の社会で通用するような力を培い、ますます国際化する未来の社会を生き抜ける子どもを育てることが教育の分野への課題であり期待となっている。

こうした社会の変化に対応するために、現在、日本の教育も大きな改革が行われている。その流れとして、平成29年3月に告示され、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の3法令が同時に改訂、平成30年4月より幼稚園、保育所、幼保連携型認定こども園など、日本の幼児教育施設から順次、小学校、中学校、高等学校と学習指導要領の改訂、施行が進んでいく状況にある。

この新しい学習指導要領が平成32年(2020年)から実施となる小学校では、これまで5～6年生の必修だった「外国語活動」を3～4年生から導入、5～6年生では「英語が教科化」されていく。こうした英語教育にも見られるように、小学校での外国語活動から英語教育への展開は小中連携の重要性を示すものであり、それはまた、幼保小の連携のさらなる充実が問われることにもつながっている。そして、この流れには、教育活動全体として「生きる力」を育むために、乳幼児期から成人までの子どもの育ちを見通した教育の在り方の検討を含むものである。また、文部科学省では、「国際社会において、地球的視野に立って、主体的に行動するために必要と考えられる態度・能力の基礎を育成するための教育」¹⁾に向け国際理解教育¹⁾から国際教育へと進めている。^{2) 3)}

このような現在の社会状況を踏まえ、Y市教育委員会社会教育課では、教育委員会が基点となり、英語教育活動を行っている市民団体と協力して幼児期からの国際理解教育としてのワークショップ「幼児と留学生のわくわくABC教室」の取り組みを始めている。この実践について、市からの受託研究として、筆者もかかわり実態調査と今後に向けての検討を行った。

幼児期の子どもの国際教育に関わる取り組みや先行研究は、近年では、幼児英語教育としての早期教育やバイリンガルという視点からの教材や実践研究等(原・伊東,2010) 海外の保育施設との比較の中の国際理解教育(高橋・首藤,2006)、言語教育から見る幼児期の特性(斎藤・佐治・廣,2017)、小学校の外国語活動からの提案(城一,2013)などに見られるように、言語教育としての外国語に関連することなどが主に取り上げられている。また、ベネッセの調査(ベネッセ教育総合研究,2008)によると、幼稚園や保育所等における課外での活動の中には、英会話等の語学教室が行われているという結果も示されている。ここで、興味深いのは、国公立の幼稚園や保育所では、有料の活動はほとんど行われていないが、私立の幼稚園・保育所等では、30%前後が有料での課外活動としての語学教室を取り入れている^{4) 5)}など、これらの傾向は、保護者の要望への対応等も含め時代の流れに対する園の方向としても捉え得る。これらを見ても、実際の保育の現場における語学教育という枠組みに留まらない国際教育に関する実践や教育の在り方の検討は、これからの課題であることが伺える。

本稿では、Y市が取り組んだ幼児期の教育としての国際理解教育の活動について、語学教育ということに留まらず、また、幼児期の子どもの保育現場での活動から「幼児教育」という視点からその実際を検討し、活動や

それを取り巻く現状における課題と今後つながっていく義務教育への連携や教育環境の発展の可能性についてまとめていく。また、今後、Y市として幼児期の可能性を広げるための事業を、公共サービスとして市内で広範に実施するという目的への展望についても考えていく。

1. 研究調査全体の概要と本稿での検討部分

幼児期からの国際理解教育としてのワークショップ「幼児と留学生のわくわくABC教室」は、Y市の教育委員会社会教育課がオーガナイズし、英語教育活動を行っている市民団体へその活動の実践を委託して行ったものである。それまで、同課が同じように関わって取り組んだ小学生向けのワークショップでの成果から浮かんだという幼児期からの活動への期待とその後の展開への方法も含めて検討することが、調査研究としての目的でもある。

本稿にかかわる調査研究も含めた受託研究は、その開催に向けての事前準備から、活動実施期間、及び、関係者の事後の振り返りまで全活動行程を調査の対象期間としている。

2017年5月18日 ～ 2018年3月31日

(Y市社会教育課担当者との打ち合わせ～関係者の事後の振り返り、及び検討まで)

ワークショップの調査、及び、研究方法については、以下の4つの方法で行った。

- ①活動計画、指導計画等の資料についての分析・検討
- ②活動実践場面の参与観察と記録の考察（活動中の映像記録とフィールドノートの併用）
- ③活動実施団体（以下仮称：P）の全活動終了後の振り返りトーク（約3時間）の記録、及び、活動幼稚園・保育所の保育者へのインタビュー調査、関係者から送付の振り返りメモ
- ④保護者への活動事後のアンケート調査とその分析・考察

実際の活動であるワークショップの開催日程は、以下の通りである。

表1 「幼児と留学生のわくわくABC教室」の開催日程

開催園と日程	1回目	2回目	3回目
A 幼稚園	9月2日(土)	11月11日(土)	12月2日(土)
B 幼稚園	7月23日(日)	10月15日(日)	11月12日(日)
C 幼稚園	9月9日(土)	*9月30日(土)	*10月14日(土)
D 保育所	*7月15日(土)	10月28日(土)	11月25日(土)
E 幼稚園	7月22日(土)	9月10日(日)	11月26日(日)
F 幼稚園	*9月16日(土)	10月7日(土)	*11月18日(土)

* 参与観察は、5回、アンケート調査は全日程対象

本稿では、受託研究における研究調査の内、主に③の活動実施団体Pのメンバーの活動後の振り返りの記録、

及び、活動実施園における保育者へのインタビュー調査を取り上げ、その分析と考察を踏まえての検討を行う。

2. ワークショップの実際について（活動の概要）

Y市社会教育課のめざした事業の目的は、幼児期からの国際理解教育として留学生とのかかわりや外国語に触れる機会を含めたワークショップの開催である。その活動の実際は、教育委員会から委託された英語教育活動を行っている市民団体Pによって計画されたプログラムに基づいて行われた。活動プログラムについては市民団体Pの独自のものであるので、詳細の掲載は控えるが、以下活動の実践の概要についてまとめる。

今年度は、国公立幼稚園2園、私立幼稚園3園、私立保育所1園の計6園での各3回のプログラムでの実施である。開催日は、各幼稚園・保育所の教育時間外の土日の設定で、ワークショップへの参加者の募集は、親子での参加、また、3回の全日程参加の条件で、各園を通して行われた。各園によって参加人数の違いはあるが、各園とも20～30組程度の参加があった。

ワークショップの実践は、市民団体Pの代表（以下A氏）が主導し、団体のメンバーがスタッフとして活動の進行をサポートした。留学生の参加についてもA氏によって、プログラムの内容に合わせて留学生の参加者の募集から調整、活動の事前指導から振り返りまで、ボランティアとしてかかわる活動内容の充実のための指導も含めて行われた。

活動の内容については、3回とも英語を主とした教材が用いられ、各種ゲーム、歌、ダンス、簡単な英会話を取り入れた遊びと、留学生とかわわる活動等、毎回12～15種類の活動で構成されたものであった。親子での参加であったが、子どもだけが、活動に合わせて随時指示されたグループになって行うものが多く、保護者は、周辺部に控えて見ている状況が多かった。歌やダンス、留学生とのかかわりの場面では、親も一緒に行くこともあった。参加の留学生については、各回ごとの人数には、ばらつきがあるものの、毎回3～8人の参加があり、全日程を通して15か国の学生33人がかかわった。

実践を行った団体が、英語教育を行う団体であったこともあり、活動はA氏の日本語での説明を入れながらの英語を主とした進行によって進められ、初めから終了までが2時間～2時間半の内容で行われた。

教育時間外の土日の開催であったが、募集及び開催会場が各幼稚園・保育所であったことにより、希望者を募った活動ではあるものの園の行事的な扱いにならざるを得ない状況とも言え、会場園のクラス担任、管理職を含む職員（参加の対象が主に5歳児、園によっては4歳児も含む）のサポートが必然的に行われるようになった。

3. 調査の結果と考察

6園での各3回の活動の全日程を終えた後、活動を実施した市民団体Pの代表A氏とサポートスタッフ4名（留学生を含む）、本事業の企画・全体運営を行っている市社会教育課職員2名、筆者を加えた計6名のメンバーが集まり、ワークショップの実践を含む活動全体についての振り返りを行った。

振り返りは、筆者が進行を行い、本事業の目的でもある幼児期からの国際理解教育としてのワークショップという活動の位置づけを確認しながら半構造的に進めた。具体的には、それぞれの担当や立場から活動に対して印象に残っていること等、お互いが全体を眺めながらフリートークの形式で展開した。（約3時間）

3-1 振り返りトークの記録と分析

振り返りトークの記録は、記述による記録と、動画による記録を併用し、後日、逐語記録として起こした。

逐語記録から、トークの中で取り上げられている内容を分類、種類別に整理し、語られているテーマを拾い出して、そのテーマごとに内容の具体についての分析・考察を行った。

語られている内容のテーマは、表2に示す通り、「国際理解教育、英語教育について」「保護者の意識や取り組みに関すること」「留学生の活動に関わる「活動やプログラムの内容について」こと」「幼児期の教育として重要な点」という5つのカテゴリで整理された。その資料をさらに具体的内容の検討のために、テーマごとに整理した。

表2 振り返りトークの記録の例とテーマの分類

Pのスタッフ、教育委員会、大学教員との全活動後の振り返りの記録と考察 ＜下線の意味＞	
-----	活動、プログラムの内容について
-----	国際理解教育、英語教育について（太線有）
-----	留学生の活動に関すること
-----	保護者の意識や取り組みに関すること
-----	幼児期の教育として重要な点等

振り返りの記録	内容の考察メモ
(Pスタッフ：Tさん) ・小さい頃から、外国人の人と触れ合う機会はずごく大事な事。私たちの時代やちょっと上の世代は、外国人が居ただけで、圧倒されたり、逃げ出したり、日本語で話しかけられても後ずさりする時代。小さい時の外国人の人と触れ合う経験はインプットされる。とてもいい経験だ。 ・留学生と触れたこと、いろいろな国の人と触れ合えたことが良かった。私たちが子どもの頃は、外国人というイメージがアメリカ人くらいしかイメージしかなかったが、いろいろな国があるんだって、いろいろな国の様子を写真やスクリーンで見せてくださって、国際感覚が芽生えて良かったと思う。	外国人と触れ合うことの意味→国際交流 留学生との交流→いろいろな国の人と触れ合える 国際感覚、国際理解 →後ずさりするような気持をなくす
(Pスタッフ：Mさん) ・…どうもお母さんたちは、国際交流＝英語、だと、だから、子どもに英語を勉強させたい。英語がしゃべれるようにさせたい。バイリンガルになるんだったら素敵じゃないか、どうもそういうイメージがあったようだ。そこじゃないんだけど、思うところをやっぱり、最近は何語で、後10年もしたらAIが全部翻訳してくれるから、英語やるよりも、親しくなりたいとか、興味をもつという気持ちを育てようというふうな感じである。	英語が身につくことと、国際理解教育との関係 保護者の活動への意識 国際交流＝英語のイメージ、バイリンガル →英語の勉強の前に、興味をもつ気持ちを育てることの大切さ

3-2 テーマ別の考察

振り返りトークの内容からカテゴリ別に主な記述を抽出し、語りのテーマを捉えながら整理するとともに考察する。

i 「国際理解教育、英語教育について」（表3）

ワークショップの実践を行ったスタッフは、自らの体験も踏まえながら、幼児期から外国の人と触れ合う機会をもつことの意義や目的について、外国の人と向き合うときの意識や態度への変容への期待を取りあげている。また、留学生とかかわることは、いろいろな国があることを知ることから国際感覚の芽生えの可能性や、英語の学習の前に、自分の思いを自分なりに伝えたり通じたりする喜び等、コミュニケーションツールとしての言語の役割を自らの体験によって感じることを大切さが語られている。

一方、ワークショップへ参加した子どもの活動時の姿を取り上げながら、1回目の緊張した姿から、遊びや活動を通して、あるいは、回を重ねることで、留学生とのかかわりにおける距離が縮まってきていることが捉えられている。具体的には、会話などのやりとりや手をつなぐなどのスキンシップ、写真を撮るなど、行動的にも積極的な様子が現れてきたことが示された。そして、この距離感の近づきは、実際に留学生の国の紹介での具体的な体験から興味や関心が広がっている成果だと感じていることも示された。

外国人教師でもあるワークショップの実践者からは、国際化という視点から、日本の社会の状況について、同じであることが基盤にあり、ルールを守る社会や安全などpositiveなことがある反面、negativeなこととして、違うことが問題になることが捉えられている。自分の能力を見せない例や英語を学ぶことへの興味や自信のなさの現れが低年齢化していることなどが示されている。また、社会環境そのものが多文化であり、自然に国際的な個性が作られる可能性のある環境であるアメリカなどとは違う日本の中で、国際化に向けて必要なことは、いろいろな状況に立ち向かっていく力や自信などの心のある子どもが育つことが求められていると投げかけている。

表3 国際理解教育、英語教育について

テーマ	具体的記述 (抽出)
<p>外国の人と触れ合うこと</p> <p>国際交流・国際感覚 国際理解教育</p> <p>幼児期と英語教育</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・小さい頃から、外国人の人と触れ合う機会はすごく大事なことです。私たちの時代やちょっと上の世代は、外国人が居ただけで、圧倒されたり、逃げ出したり、日本語で話しかけられても後ずさりする時代。小さい時の外国の人と触れ合う経験はインプットされる。とてもいい経験だ。 ・留学生と触れたこと、いろいろな国の人と触れ合えたことが良かった。私たちが子どもの頃は、外国人というイメージがアメリカ人くらいしかイメージしなかったが、いろいろな国があるんだなって、いろいろな国の様子を写真やスクリーンで見せてくださって、国際感覚が芽生えて良かったと思う。 ・他…本とか少し読んで、幼児、小学生の時に、そんなに英語をガンガン勉強しなくても外国人と仲良くなりたいたいというその気もちをまず育てることが大事だと、英語だと後で勉強しても間に合うし、塾にいても、今はパソコンでもできるけど…後ずさりをするような気もちをなくすっていうのがやっぱり、垣根が少ない幼児の頃がいいっていうのを私も思った。だから、いろいろな外国人と接して、怖がらない、自分から話しかける、通じたときの喜び、例えば、サンキュー一言言われただけで、すごく嬉しくて、それで英語の道に進むという子もいる…英語自体はそんなにたくさんは身につかないし、身につけなくてもいいような気がして…
<p>活動時の子どもの姿から</p> <p>遊び、活動通して 距離が近づく</p> <p>スキンシップ</p> <p>具体的体験</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・それぞれの幼稚園で3回あったが、1番最初にあった15分くらいは、緊張して難しいが、2回目とか3回目の子もだとか、みんなすごく留学生と話したりとか、学生とボディータッチとかするスキンシップとかあったので、その怖いかいところはあまりなくなったと思う ・知らない人とのコミュニケーションガードはあるんじゃないかと私は思っている。…でも、子どもたちはそのガードはないので、だれでも自由に話せる人なので、それがなくなると、自分は思っている… ・プログラムは終わったが、セルフイとったりとか、留学生と手をつないだりとか、なかなか帰れない人もいたので、良いことだなと思った。 ・このプログラムは、子どもたちにとって、一番何が楽しかったかという、もちろんゲームとかいろいろな歌とか、それはもちろん楽しかったが、留学生がいたからこそ、触れ合うチャンスがあることはいいことだった… ・留学生の国の紹介で、…いろいろな衣装を持ってきてくれた子だとか、帽子をかぶらせるとか、お金を直接、お金を非常に良かった。そんなのを実際見せて、触って、コインも触ってみたい、幼児はそっちの方がいいのかなど。(現物がね。)そこから興味をもって、まず第一歩みたい感じだ。 ・実際に服とか帽子とか実際のものがあると、印象があって、子どもの頃にこれを見たとか印象が強いので、その印象とかが凄く大切だと思う。実際にもっといろいろな外国から持ってきたものを触る時間があればいいと思った。 ・最後、プログラムが終わったのに、だれも帰らない。それもなんかいい結果なんじゃないかと。子どもたちも帰りたくないっていうのもすばらしい。 ・みんな、よく写真をとった。途中はやっぱり遠慮して…。終わったらもう2ショット ・みんななんかハグとか、学生の膝に座ったりとか…なんか本当に仲良くなったなという感じがした。
<p>国際化という視点からみた日本の社会、教育環境</p> <p>同じであること</p> <p>自分から発信すること、行動すること</p> <p>子どもの発達</p> <p>国際理解と多文化社会</p> <p>日本の中で</p> <p>国際社会に生きる心を持つ子ども</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・日本の社会はいつも学校に行ってもどこに行っても、全部いつも同じである。…High limit society、この社会のこの上に合わせて動く個性しかない、日本人の。…negatively なことじゃなくて、良いことだが、positive なこと ・良いことだ、ちゃんとルールを守る社会、安全とかいろいろ良いこといっぱいあるんだけど、negative なことが、ちょっとでも違うことがあったら不安になる。日本の社会の大きな問題… ・この社会が、同じように動いているから、どこでもあんまり変わってないし、同じ日本人、同じ日本人、同じ社会、同じようにルール守ってきて、それでちょっと外国人に会ったら、話したいと思うかもしれないが、でも、こっちは開けないと出てこない。っていうことがある。 ・私の国から見ると、…実はわからなくても、話しかけることもある。…チャンスがあったら、ちょっと自分の能力見せたい、自分の creative という考え方が強い。 ・日本の中は、たぶんそういう風な人いるかもしれないが、だいたいみんな自分のその能力か、その欲しいこと、その理性、見せないようにしている。たぶん。 ・10年前とか見ると、中学生になって、英語興味がすごいあった。で、ちょっと何年前に見ると、もう中学生もう、もちろん興味がある人は興味あるけれども、英語ダメ、難しい、なんか、だめ、私はできないとか思う人が多い。でも今、中学生も、そこに行ついたら、小学生も今も同じことに、4年生、5年生、6年生ぐらいになったら、もうダメっていう、ちょっと negative な考え方になっている。 ・親が1年生、2年生、3年生までぐらいかな。行きましようって言ったら、子どもがOK来る。でも4、5年生になったら、…英語ダメダメ、もっと遊び、おもしろいゲームとか。だから、親が pressure ができるぐらいなら、子どもたちが行ってる。でも親の control が少なくなるほど、子どもたちが自分の自由に決めると、もうダメっていう、なんか negative な考え方になっている。 ・ここをアメリカとかいう国なら、良いことが、国際理解のことを教えずとも、自分が生きている社会が multi-culture society (多文化社会) だから、いろいろの人と出会う、いろいろの言葉を話している人がいるから、自然で自動で、multi-culturesociety の個性、personality が自動でつくってもらえる。でも日本は、その機会がない。 ・日本の教育の一番 negative なことは、…日本の中で生きていける、日本の中でどういったルールを守っていく社会をつくるだけだと思う。ちょっと違って、challenge に向かういろいろな situation にも向かっていく力がある、自信がある、心ある子ども、心を持つ子ども、…今あるやりとりが足りてないと思う。 ・英語やるよりも、親しくなりたいたいか、興味をもつという気持ちを育てようというというような感じである。

ii 「保護者の意識について」 (表4)

次に、活動に参加した保護者の意識を捉え、活動を進める実践者の国際理解教育への思いやねらいと保護者の意識との違いを具体的に検討している。

保護者の意識として国際交流＝英語というイメージをもっている保護者が多く、英語が話せるようになることへの期待や評価が大きいことをあげている。これに対して、教育者は、世界に向かう自信やいろいろな状況に向かっている力をつけることを目指しており、保護者

との意識のGapがあることを指摘する。しかし、経験のprocessが続けられることで、英語というだけではない経験を積み重ねることの大切さが語られている。

実践者であるスタッフの活動への思いには、留学生が活動に参加することで、子どもが留学生に触れたり興味をもったりする機会ができ、そこから国際的な意識が育まれることを見通している。また、こうした教育的な場を作ることがボランティアとしての活動の目的であり、それを共有し興味を持つ人が広がっていることも示された。

表4 保護者の意識について

テーマ	具体的記述 (抽出)
<p>活動に対する保護者の意識と実践者の意識のGAP</p> <p>保護者も英語ができなければいけないのでは…</p> <p>国際交流＝英語、バイリンガル、英語が話せること</p> <p>保育者、教育者の目的</p> <p>保護者の目的、期待との差</p> <p>外国の人、いろいろな状況に向かう力をつくる</p> <p>Global language</p> <p>英語という手段を使う</p> <p>国際的な個性をつくる</p> <p>Process を続けて理解を深める</p> <p>活動への思い</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・お母さんも英語がしゃべれなきゃいけないんじゃないかと言うことで、私は申し込まなかった。なんでね、と言って、という感じなんだが、親の壁も少しずつ突き崩したい。 ・後半は時々おかあさんに話かけて、お母さんたちの気持ちを聞きながらこちらからも目的を伝えるようにしていた ・お母さんたちは、国際交流＝英語、だと、だから、子どもに英語を勉強させたい、英語がしゃべれるようにさせたい、バイリンガルになるんだったら素敵みたいな、どうもそういうイメージがあったようだ。そこじゃないんだけどな、思うところをやっぱり ・自分の子どもが英語が上手にしゃべってほしい。テストとか受けて、証明書とかもらって、大学院とか、いい高校とか、いい大学に入って、いい仕事をもらうのは、保護者の一番大きな目的と思う ・保護者たちの目的、考え方と、私たちみな <u>educator (教育者)</u>、大学の先生とは <u>P のスタッフとかが考えてることと、まだつながってないところいろいろある。</u> ・心を開いて、世界に向かう自信をつくる。 ・外国の人と外国のいろいろな <u>situation (状況)</u> に向かう <u>energy、力をつくるため、ちょっと国際交流的なことがもっと目指して、考えていると思う。</u> ・英語は、<u>Global language</u> だから、英語っていう <u>media (手段)</u> を使って、<u>もっと英語も勉強しながら国際的な個性をつくることは、たぶん educator (教育者)、私たちみたいな人が考えていること。</u> ・保護者たちの期待することと、私たちの期待することが、<u>まだまだ同じ、Gap (差) がいっぱいある。</u> ・何回も何回もこの <u>process</u> が続けると、その <u>understanding (理解)</u> ね、もっと理解してくれる、じゃあ、英語だけじゃ足りないってこと、 ・すぐに仲良くできるような心をつくるのは大切…この <u>Gap</u> のサイズが短くすることがとても大切… ・英語よりも、自分の子どもたちが習うことがいっぱいある。経験することがいっぱいある。
<p>活動の目的</p> <p>スタッフの思い、ねがい</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・少し本を読んで、「朝日新聞の切り抜き」これを見たとき P の活動紹介かと思った。小学生の英語に留学生を使うという記事だが、同じようなことをやっている。やはり、同じようなことを言いつてあったり、課題も書いてあったりして、ぜひ紹介したいとずっと思っていた。 ・通して思ったことはよく保護者に言うのだが、隣に外国人が座ってもビビらない子を育てましょう。 ・とにかく留学生に触れる、留学生に日本の子どもに触れる、幼稚園に入る機会をもらうその橋渡しができるのがいいと思った。 ・英語やるよりも、親しくなりたいとか興味をもつという気持ちを育てようというというような感じ。 ・市民団体 P っていうのは、こちらの人が集まって、ボランティアで、活動している。…決まった人だけじゃなくて、誰でも興味がある人が、どんどん入っている

iii 「留学生について」 (表5)

ワークショップの目的の一つでもある留学生の参加について、留学生自身は、この活動をどのように思っているか、また、どういう意識で参加し、準備など当日へそれがどのようにつながったのかも現れてきた。

活動を支えるボランティアとしてかかわる留学生であったが、日本の生活や状況がよくわからないことに加えて、活動の対象である小さい子どもとかかわることに慣れておらず、あるいは、初めてであるなど、幼児期の子どもの理解からその接し方など、戸惑いが多かったことが伺えた。しかし、それに対しては、活動を主導した

A氏が留学生一人一人と連携しながら、活動のイメージが持てるような情報を伝えたり、必要な準備について知らせ、役割を持たせるなど活動のための事前指導を丁寧に行いながら、活動が充実するように動機づけから実践までを見通した指導がなされていたことが示された。

こうした工夫もあり、留学生同士の口コミで希望者が集まる体制ができ、全活動での参加者が33人15か国の留学生の参加への繋がったことが明らかになった。

留学生にとってのもう一つの活動の意義は、活動に参加することで、留学生同士のつながりを広げたり、日本の幼児期の子どもや保護者とのかかわりなど、日本の生

活に触れる機会にもなったこともあげられた。

この度は、A氏の尽力よりそのつながりから多くの留学生の参加者を得ることができたが、今後の見通しとして、振り返りトークの後半には、留学生のボランティア参加者を集める方法についての議論がなされた。留学生

の現状として、異文化体験の様々なイベントやアルバイトや旅行のため時間の確保が難しいことなど示された。その方策として、大学のカリキュラムに留学生の教育現場での活動を位置づけることの有効性や留学生の参加を促すような情報の発信や広報の工夫などが挙げられている。

表5 留学生について

テーマ	具体的記述
<p>留学生にとって 留学生同士の交流へ</p> <p>子どもとかかわること 子どもの理解、関わり方が難しい 子どもに会うことがいい経験</p> <p>留学生は 自分にとってのイベントと思って参加 留学生が興味を持てるイベント 口コミで広がる</p> <p>33人15か国のつながり</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・留学生の方もお忙しくて、同じ国の人や同じ学部の人とは交流があるみたいだが、近くにおられるのに、なかなか交流することがないというのを聞いたことがあるので、…留学生にとっても日本で勉強している、<u>日本で生活しているという意味があった</u>のではないかと。 ・留学生も自分の国の子どもにかかわった経験がない人も居たと思う。そこが難しいかもしれない。 ・一番最初は、<u>子どもたちにどうやって話せばいいかわからなかった</u>。そこが一番難しい。 ・子どもに向けてのプレゼンとか自分の国の紹介はちょっと難しかったと思う。何を見せたらいいか、どういった説明すればいいか、子どもたちの理解のためにどう説明すればいいかが難しかった。 ・幼稚園の子どもにはあったことなかったの、学生にとっては、いい経験になったと思う。 ・留学生も私たちも同じスタッフということで、子どもたちをいかに喜ばせるか、という風に関わってもらったというものがあったし…また、スタッフでもあり、尚且つ、日本でできない体験をそこで積んでもらったっていうのは、私たちの活動で得られた成果かなと思う。…その後の交流が続く ・留学生と話しはじめたら、<u>全然日本のこと知らないし、日本の子ども、日本の社会、何にも知らないし、話したら、もつと子どもとかかわるの好きって</u>いうことがもつとわかってきた ・留学生のところから見ると、自分の、自分のイベントと思っている。 ・30、35人の留学生在が、外国人の人が参加してきて、私は一人ひとりといつもコミュニケーションしている…みんながいつも頑張って準備してきて…、一人一人も素晴らしい教育を出したと思う。 ・留学生が書いたのが、「私、Y大学に来られて、全部で5か月だけ、Y大学の中でいろいろイベントに参加したんだけど、今まで私が経験された中に、一番意味があるととても助かった、ととても勉強になりましたイベントがPのイベントでした。」っていうメッセージが私残っている。 ・Y大学の来られたらすぐに楽しめる遊べる、利用できるようなプログラムとして…人々の口コミ ・33人の全部で15ぐらいの国の人、みんなつながっている、ここにいる人もこれから来る人も自分のそろそろ来る人もつながっている
<p>学生の対応、事前指導 どんな留學生が？ 1回ごとが型にはまらないプロジェクト 事前の打ち合わせ、準備と役割分担 動機づけやモチベーションを持たせたのでは？</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・毎回どんな留學生がくるか、私たちスタッフが知らないのて来てみて初めて今日はこの国の人…、短い打ち合わせの中で、いろんな準備、カードを書いてもらったりとか、役割分担 ・1回ごとが型にはまらない、プロジェクトみたいな感じで、それが毎回形になって、子どもたちの笑顔を引き出せたのは、<u>それまでの入念な留學生との打ち合わせ無しには、これはまず無理だった</u>だろうなど。Bさんのいろいろな苦勞があったのこと。 ・留學生さんにもいろいろなタイプがあって、もちろん子どもたちと初めて、自分の国でも子どもと接することがない留學生もいて、すぐくびくびしたが、それまでの準備、いろんな動機づけとか、<u>モチベーションとか持たせたのは、準備が相当あったのかな</u>と思った。
<p>留學生への対応と参加者を集めるための方策について</p> <p>大学のカリキュラムへ</p> <p>留學生の現状 様々なイベント アルバイト 旅行 活動の内容などがわかるような情報の発信の工夫</p> <p>参加を促す方策 一人ではなく、留學生同士と一緒に参加できるような工夫</p> <p>参加した留學生は、何度も参加することもある</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・大学側の留學生のカリキュラムを一端で…、日本人とのかかわりあいも増えていいと何となくちょっと思った。そういうプログラムを作るのは、カリキュラムはむずかしいのだろうか。 ・イベントは本当にたくさんある。異文化のイベントとかはあるが、ただそれを活かすか活かさないかは人によって変わるので、忙しい人もいると思うし、バイトも忙しい人も、もう一つは、旅行ややっぱり興味がある人が来てくれると、2日目3回目からは変わる。1回目はどんなところだろう、頼まれたから来たけど、それがもし本当に楽しかったら、2回目からは自分で工夫してやってくる。 ・むしろ強制的に、単位習得のためになると、いやいやにきて、おもしろくないつまらなくて、しょうがない行かなきゃいけないかと思うかもしれない。そうすると、子どももおもしろくない。 ・人数がとても大切。人数っていうのは、ただ、一人で行く学生が行くとしたら、とても不安になる。留學生と自分の友達、か、留學生みたいな人々が集まるところが、強くなる。3人いると安心する。 ・いっぱいイベントがあるかもしれないが、…留學生が、どのくらい参加できるか、自分の役割とか、多分よく知らないと思う。 ・facebook…があるから、そこで、何年間、今までの歴史のビデオと、写真があるから、まずだれにもそれを見てください。…それが大きい。:映像はとっても大きい。 ・私のところは、1回行ってじゃ終わらない。何回も続けて…、6回くらいあったら、ちょっとやめて…他の人にチャンス渡す、ずっと行きたい人もあった…他の人のチャンスもfairにしたいから。 ・私のところに来られた学生が喜んでくると聞いたら、本当に自分役割がよくわかりました。…1回、3回、来るほど、本当にスタッフみたい、先生見たいな力も出てきて、その動きがよくできたと思う ・こんな小さな子どもと関わるのはなかなかない ・同じ人が続けてこられる機会があったし、留學生が続けてこられたら、違う留學生と出会って、話して話して話して、group-dynamicsへ。 ・たぶんほとんどの留學生が、来られて2か月3か月から、アルバイト始まっている。…土曜日日曜日に来られない人もあったけど、…ちょっとまって店のシフト的な組み合わせをお願いする ・それがいつもあるってなると、口コミで、広がるっていう力がすごくある ・イベントはたぶんいっぱいあるから、留學生が選ばないと思う。…ちゃんとわかるような説明の場所をつくるとか、そういう工夫をすればいいのかなと思う。

iv 「活動やプログラムの内容について」(表6)

活動やプログラムを主導したA氏のねらいや思いには、活動を通してかかわる人が集まり、それぞれの役割を担いながら満足感を得ることが示された。活動の場がコミュニティとしての役割を担いながら、人的資源を有効に活用されるようにすることで、個人の資質・能力の向上にもつながることなども捉えられている。また、保護者が変わることは、家庭での子どもとのかかわりにも影響することの意味も活動の目的としてあげられてる。

プログラムの1日の活動のたくさんの種類や活動内容をつなげながら段階的に発展させ、子どもや保護者の満足感や1回の活動が楽しく充実するような組み立てをし

ていることなど、計画者の意図が示された。

実践での活動の進行では、6つの園の参加者の人数にばらつきがあったことへの柔軟な対応や、遊びのコーナーの担当の仕方もスタッフの個人の特性を生かしながらの臨機応変な展開であったことなども見え、スタッフの能動的な姿勢が伺えた。

活動の会場を引き受けた各園での課題として、土日の開催が挙がっている。スケジュールやスタッフの調整など、園としての対応や保育者や保護者への理解をどのように得るかなどの検討事項が見えてきた。それに伴い、園によって、活動への協力の仕方がいろいろあったことも示された。

表6 活動やプログラムの内容について

テーマ	具体的記述(抽出)
活動の目的 コミュニティをつくる 人的資源の活用 参加者のそれぞれの役割と満足感 保護者も力がつく、変わる 子どもへの影響 活動終了時の工夫 つながり	<ul style="list-style-type: none"> ・Y市にY県にいる人々が集まってここにいる人々の力がここにいる人の子どものため使う Community circles、 ・できるだけ、いろいろパートナー、いろいろ人々がそれに参加して行きたいということで、…中学生や高校生やY大学の日本人の学生や社会の人々や、英語の先生やY市のいろいろの学生や、みんな連れてきて、ここにある、Human resources (人的資源) ね、人間をよく使うこと、 ・実際に会場に来られたみんなもなんか役にたつことになったと思う。…そこに来る人…ちょっとでも参加してほしい、そのようなカリキュラムを作っていた。そのようなアプローチをやっていた。 ・保護者たちがそれもレベルが上になってきて、来られた留学生ともコミュニケーションできた。 ・子どもたちがここで習ったことが、家にいったら、ちょっとでも生かしていきたいと思ったら、…保護者ですよね。子どもだけじゃなくて、保護者たちもよく変わってきたら、私の本当の目的ができると思ってる ・そこに来られたいろいろの人々を満足してあげて、ちょっとでも一人ひとりが役に立つような何か入れて、家に帰ったと思う。それがPのとでもすばらしいことと私は思っている。 ・イベントの前は、留学生から memorial card みたいに書いてもらって、それを対象にして、写真とかつくって、参加して来られた143人の子どものための Album をつくって、終わった。
3回のプログラムの内容 段階的につながるように 十分な contents いろいろな活動 楽しくするために みんなが参加できる 自然に英語を覚える形 活動前からの構想	<ul style="list-style-type: none"> ・day1、day2、day3、私はこのプログラムをやる前に、前から考えている。…day1で終わりじゃなくて、次のday2につながるものが、先にやっている ・子どもたちちょっと、難しいこともあるかもしれないが、その間がない理由が、この spirit が、ある心の喜びさがなくならないで、同じ energy をすぐ使うため、jump している。 ・十分の contents がないと、いろいろ合わせている。歌とか踊りとか game とか、留学生と交流するとか、保護者とかかわりとか、いろいろ混ぜているもがないと、帰るときがあんまりうれしく帰らないと思う。 ・contents を非常に少なくしたら、今までの経験から見ると、そこまで楽しくならないと思ってる。 ・day1、day2、day3 と、つながっていく ・来られた人が、留学生のうち、Foreign staff、スタッフみんなも、自分の役割もちゃんとあるから、みんなも参加できる仕事ができるようなことも、含めている ・紹介とか少なくして、子どもでも知らないうちに、situation が変わって、自動で自然で、覚えていく形。…そういうことを考えて、カリキュラムを作っていた。 ・去年の1月。その時から、準備が始まった。その時から、今も、参加した。だいたい1年間、もっと、これくらいの時間。だから、イベントは18回だけど、イベントまで、みんなが集まってくるのは、プログラム作るのは、一番大切なこと、一番難しかったこと
実践での課題と工夫 参加者の人数 担当と臨機応変の対応 スタッフの活動での役割	<ul style="list-style-type: none"> ・日によって、幼稚園によって、人数が凄く違うので、でも、時間は一緒なので、工夫して…。 ・時間内にだれかできなかったということがないように、時間と子どもたちの活動のモチベーションとか様子を見ながら、とにかくすごい神経を使った ・参加人数が日によって、まちまちだったので、そこが凄く難しかった。 ・コーナーは固定ではないが、当日の朝、振り分けた。でもやったことがある方が楽なので、臨機応変にできることもあるので、 ・ほぼどのコーナーもやったが、多かったり少なかったりその時臨機応変にいろんなことをやった。 ・ゲームとかは、また頑張って新しいのとかが考えられたらいいなとは思っている。
各園での課題 土日の開催 保育者、園の理解 園での動きや協力の仕方のいろいろ	<ul style="list-style-type: none"> ・15ぐらいの幼稚園から話しかけた。半分以上の幼稚園が忙しいか。スケジュールいっぱい。 ・興味があるんだけど、平日しかできない。土日がスタッフに、仕事してくださいっていうことが。…幼稚園にとって、問題がある。私が土日しかできない。 ・保護者まで、幼稚園まで、同じように理解してもらおう、この問題が一つある。 ・幼稚園の中にも、management によって、先生たちの動きによって、協力してくれたレベルが、いろいろあった。

- ・土曜日日曜日の開催っていうところで、もちろん、こちらの提供する側のできる範囲のことと、園の受け入れがあったが、やはり今、園自体が、勤務をどうするかっていうことが非常に大きくて…
- ・それはスタッフの問題もあるし、園でやるっていうことになると、どう園の行事としてそれを位置づけるかっていう問題があって、
- ・土曜日にやるっていうことになった時に、今回なんか、どこも、先生たちはボランティアで参加するが、本当にそれでいいか…

vi 「幼児教育として重要な点」

プログラムの計画や活動において、学術指導と言う形で筆者もかかわったこともあり、幼児教育の視点からの気づきも含めながら、活動の振り返りと今後に向けての方策と一緒に検討した。活動実践は、市民団体Pがもつこれまでの英語教育の実践の蓄積がベースとなっていることから、実践途中の内容ややり方を含めた修正等は微修正にとどまり、大きくは難しい状況であったが、振り返りの中で、今後に向けての見通しとして捉えられたことは成果でもある。

幼児期の子どもの特性や一人一人に合わせて、活動や

計画を修正することなど、その時期に子どもにふさわしい活動の内容ややり方、時間や展開の仕方など、今後検討していくことが必要であることなども示し、実践での課題を共有した。また、プログラムの計画者の意図と、子どもの実態については、保護者のアンケートからもその課題が浮かび上がり、今後への検討事項として共有した。さらに、子どもが活動に自分からかかわっていけるような工夫や保育者、実践者の援助の必要性など、今後の課題とともに、プログラムの目的と子どもの実態からの振り返りの意義をそれぞれに実感した時間となった。

表7 幼児期の教育として重要な点について

テーマ	具体的記述（抽出）
幼児期の子ども活動 幼児期の子ども特性 いろいろな人とのかわり、文化 具体的な体験 子どもにふさわしい活動と活動の時間や展開 実践者の思いと子どもの実際 子どもの姿と保護者	<ul style="list-style-type: none"> ・幼児教育、幼児期の子どもって問題が、全部に絡んできていた ・英語っていう入口はあったとしても、いろんな国の人とかかるとか、いろんな文化に触れるっていう内容を取り入れられるっていうのは、とても大事なことだったんじゃないかなと思う。 ・言葉じゃなくて、気持ちが開かれたら、開わっていける。 ・その特性として、言語が優位の時代じゃないので、具体物が凄い大事 ・<u>幼児期ってことを考えた時に、プログラムの時間の長さ、展開の1回のゲームの時間、</u> ・<u>幼児期は、すごく差がある。</u> ・2日目、3回目、自分でだれかにお手紙書いてきたり、前回習ったから、こんなあいさつしようと思っ備してきたり、…、<u>最初が受け身だったところが、主体的になっている。</u>…一つの自分のやることの中に入ってきている ・<u>そういう自分ができるところが増えていくような時間の配分の仕方というのと、プログラムの配置の仕方…工夫していく</u> ・A先生にはA先生のイメージがあって、そのギャップを埋めていくって ・やればついてくるのが、その時期あっているかどうか。その辺ももっと精査していく、整理していくと、より良くなる…子どもが喜んだら、親が絶対についてくる。
幼児期の子ども活動を考える 対応と方策 子どもの姿から 子どもの理解 活動の工夫へ 活動の目的 子どものために アンケートから 振り返る 慣れることとふさわしい活動かどうかを見極める 子どもの姿から振り返る 活動時間の調整へ	<ul style="list-style-type: none"> ・<u>子どもが疲れるかもしれない…2時間っていうのは、ちょっと難しい、いっぱい resource が集まってきた、子どもだけじゃなくて、子どもの保護者が、子どもがもちろん対象だけど、保護者、留学生、私は、みんな見ている。みんなもなんか最後に、満足して帰りたい、楽しく、喜んで、帰りたいというものがあるから、音楽とかビデオソングとか、踊れるのがやりたい。ちょっと長くなったプログラムだったかもしれない。</u> ・目的が何重にもなっているから、…苦労された部分だったと思うが子どもは、環境を選べない。…子どもを一番考えて、こちらが柔軟に変化していくことも非常に重要だところ ・幼稚園でやるっていう目的をもう一回考えてみる…このイベントのいいところは、いろんな目的が、ミックスされているところ…<u>一番の目的は子どものため</u>…、大人が何とかできる部分は、工夫していく余地がある ・<u>保護者、長いっていうコメントもあった。</u>…そこは、率直にアンケートにしっかり答えてくれて、そう確かに感じたんだろうと、…長かったっていう風なコメントは、何か所かは、出てきたので、1回目も2回目も3回目も、ま、3回目はそこまでないかなとは、1回目が一番多かったかもしれない ・慣れるっていうことが、子どもにあった引っ張り方なのか、実際どうなのか。…<u>引っ張れば子どもはやる。それが本当にそこにあっていいか。</u>1回の、この1年のイベントだからいいのか、…自分のそれぞれやりたい側の思いと、実際の子どもの姿っていうのを考えてみるっていうのが、今日みたいに、振り返る意味がある ・このプログラムを作ったのは、カリキュラムを作ったから、イベントっていう意味もあるから、<u>festival</u>みたいなものだったから、私も、ただ教えるっていうことじゃなくて、プレゼントを交換したり、踊ったり、<u>game</u>とか、ちょっとそれが長いんだけど、その中に、難しい英語を教えたっていうことはないと思う。時間がかかったっていうこと、これから、続くことについて、ちょっと考えると、<u>2時間ではないもの</u>を考えてみる。<u>多分90分までと思う。</u>

vii 事業のきっかけ、行政の立場から（表9）

振り返りトークの内容の5つのカテゴリーに加え、本事業を企画、運営を支えた行政の立場からの振り返りは今後に向けての課題にかかわるテーマが示された。

本事業は、Y市の社会教育課が関わり行ってきたこれまでの小学生を対象とした英会話ワークショップが基盤にあるが、Y市内やその近郊に大学がいくつかあることなど、留学生の受け入れが多いという市の地域としての特性を生かした取り組みとしての新たな試みでもある。

その一つとして、幼児期の子どもへの教育の機会を検討し、国際理解教育から国際教育への今後の学校教育の方向を見据えながら、地域の公共サービスとして、行政がどのような役割を担っていけるのかということも含めた今後の可能性への検討も含んでいる。

活動の基盤は、地域で英語教育にかかわる活動であっ

たが、行政担当者の経験を踏まえた実感から、本事業へのアイデアへとつながったことなど、国際化社会に生きる人を育てる環境としての地域の役割や地域の活動を支える行政のできることを考えるなど、担当者の思いが活動を支えてきていることや、それ自体が行政としての役割でもあること、また、市民の持つ資源を活用していく方策としての協働の可能性などが表れてきた。

振り返りの中には、留学生の調整や対象の希望園への投げかけ方、あるいは、活動を続けていくための財政的な課題など、事業をオーガナイズしていく役割としてかわる様々な事柄の整理が必要であること等、具体的な課題も見えてきた。これらの事柄も含め、どこまでどのように役割として担当し、または、役割を他へ分担していくのかなど、事業の継続のための方策を考えていくことを次年度以降に引き継いでいくことも見えてきた。

表8 事業のきっかけ、行政の立場から

テーマ	具体的記述（抽出）
この取り組みのきっかけ	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちの英語を今からどういう風に進めて行こうかということ、いろいろ指導主事の先生方と話をするというそういう側にいた。Y市もそういう意味では、イングリッシュキャンプなどの取り組みを行ってきた。…全国的に拠点をもつ大きい企業でノウハウをもっている業者さんへの委託だった。 ・地域の交流センターでこじんまりとやってみようということで、…3、4か所で、子どもたちを集めて、手作りのピラを作ったのがきっかけである ・思った以上に上手くいったので、これはいけるということで、4回、5回重ねて自信をつけた。一昨年、…Pという組織を作って、やって、8回、それはもう手ごたえのある大きなイベントをやった ・英語の先生であるA先生は、英語を教えたり…留学生でもあり研究生でもあるという立場からと、我々スタッフを中心に子どもたちに英語を通じて活動をして貰おうというのが、目的だった ・親も子どもに英語をさせたいとか、外国人の先生が直接教えてくれる機会というのが、公共の立場で提供できるというのはやったことがなかったので、これはすごい新しいことである ・留学生を巻き込むという試み
活動について行政の立場の思い	<ul style="list-style-type: none"> ・教育委員会にいた時に、市民と共同で何かできないかというところに本当にもう近づいてきている、私たちもちろんプロフェッショナルではないので、ちょっと難しい、無理がくることもあるが、でも細く長く続けることにも活動って大変意味があると思うので ・委託である程度主体的に教育委員会が準備をしてというところの関わり方ができたんだが、補助金という形になるとちょっと一歩立ち位置を変えて…、市民団体としてPがどのようにするかという自由度がある程度高まる ・保育園の先生は、教育委員会が挨拶に行った方が、信用してもらえる。教育委員会がちゃんとかわっていることを説明をして、その上で、趣旨も理解していただいて、今回6園快く参加いただいたんじゃないかなと思っている。 ・留学生さんに声をかけるにあたっては、ちょっと組織的にアプローチする部分と、先生にダイレクトに直接アプローチする部分と分けながら実施しないと、留学生さんになかなか情報が届きにくいっていうのも知っていた ・Y市にY大学だったり、Y県立大学だったりっていう留学生さんもいっぱい来れるということと、小学生向けの英語事業っていうのを昨年実施をして、アンケートも結構綿密にとって…小学校の低学年、1、2年生はまだ、英語に対しての壁がそこまでないんだけど、3年生以上になってくるとだんだんとその英語に対する取り組みの気持ちがどんどん下がっていったんじゃないかということを感じたので、もしかしたら、もっと早いタイミングで、英語であったりとか外国であったりということを知る機会をY市でも持つ機会があった方がいいんじゃないかなっていうのが、…対象を幼児にちょっと定めてみたらどうか… ・日本人も英語を勉強しなければいけないっていう意識が、年々変わっていつの間にかなっている風にすごく思っていて、同じことを何年もやるっていうことも大事なんだが、ちょっとずつ変化をさせていくことも大事なのかなと。 ・どう感じたっていうのを率直に、意見交換をしながら、次のプログラムっていうのをまた、作っていくっていうことに、教育委員会としても関わった方が、たぶん、団体の動き方が動きやすいんだろうなと思うところもあるので、…関係を維持しながら、子どもたちに対して何が良かったっていうことを一緒に考えていけるといいなっていう風に今は思っている。

まとめと全体考察

本稿では、留学生を取り込んだ幼児期からの国際理解教育を目指したワークショップの実践について、それを展開した関係スタッフの事後の振り返りトークをもとに、実践の在り方や公共サービスとしての可能性等について検討してきた。この成果をもとに、これからの時代を見据えて国際理解から国際化している社会の中で主体的活動していける力を培うことを視野に入れた国際教育へと展開している流れを考慮すると、振り返りトークの内容の中に浮かび上がったテーマを5つのカテゴリーで整理した中から、本事業の今後の展開に向けての課題として、以下の4つの点を取り上げられた。

- ①幼児期の子どもからの国際教育は、何をねらいや内容とするのか。
- ②日本の子どもと保護者の国際教育に対する意識やその現状を考慮すると、幼児期の子どもの教育活動としてどのような活動やプログラムが望ましいのか。また、どこで行うのが適当なのか。
- ③留学生が参加する活動をどのように組み立てるのか。留学生の対応の窓口や活動での留学生の役割、活動の事前指導等は、だれが担当しどのような内容が必要なのか。
- ④市と地域が連携して行う公共的なサービスとして、今後、継続、展開するためには、市がどこまでを担い、活動の実施はだれがどのように行うのか。

今回の活動は、活動全体に関わり実践も主導した市民団体Pやその代表A氏のもつこれまでの英語教育の実践の蓄積が、プログラムのベースとなっていることから、活動への展開もそれらの中で実感されてきた成果を見越した思い入れが強く感じられる内容となった。

①については、振り返りのスタッフやA氏の言葉に示されるように、世界は日本だけではなく、いろいろな国やいろいろな国の人がいて、多様な生活や文化があることを幼児期の子どもの時代から直接体験する機会があることの必要性や重要性をあげることができる。

遊びや生活の中で、自分から環境に関わりながら総合的な発達を遂げていく幼児期の子どもの発達やその特性を考慮すると、留学生も含めいろいろな国の人や日本以外の国の言語や文化に直接触れられる機会があることや、1回だけでなく、回数を重ねられるプログラムとして計画的に展開されることの意義は大きいと思われる。これらは、振り返りにも示されたように、参加の回数を重ねる子どもや保護者の活動への参加の姿が、次第に能動的变化していく様子や、留学生との関わり方、あるいは心理的な距離が近づいていることなど、活動関係者も実感

している。子どもたちが遊びや活動を展開するその同じ場に、いろいろな国の留学生を含む外国の人がいて、子ども自身も自ら関わりながら、お話しや歌などを通して、外国の言葉を聞くことや、会話も含めたやり取りをすることなどは、幼児期の子どもが無理なく体験する世界を広げていくことにつながるだろう。具体的な活動の内容として、留学生が自分の国の生活に関わる衣服や食べ物、お金や国旗など、実際の具体物を紹介したり、使っている言語の簡単な挨拶や数字、その国の歌や遊びなどを一緒に唱えたりすることなどのやりとりは、日本以外の国の生活や文化が、幼児期の子どもの遊びや生活の延長にある環境として見えるような形で取り入れられ、関わる子ども自身もこれらの事物に興味・関心をもつところから活動への能動性が見られた。これらの成果からも、こうした具体的で体験的な活動が有効であることも確かめられた。

このことは②の幼児期の子どもにふさわしい教育プログラムの計画や活動の展開の仕方にも関連してくるが、この度の実践は、活動実施団体の小学生以上の子どもの教育実践が基盤にあることから、プログラムの計画や実際の活動の展開においても、内容が多種多様、盛りだくさんで、幼児期の子どもの実態に合わせる展開よりも、内容をこなしていくことが優先される状況となった。それに伴い、活動の展開における子どもの動きも、活動ごとに隊列やグループづくりなど転換や移動が目まぐるしく、また1回の活動時間が約2時間半という長時間の計画にもなっていた。しかし、「やればついてくるが…」の振り返りのつぶやきにもあるように、子どもを引っ張ってさせてできていることと、その時期の子どものペースや内容として適当かどうか、あるいはその時期に必要な経験なのかどうかということなど、幼児期の教育のあり方に関わる課題が明らかになった。

今回の活動の展開については、関わり方はそれぞれ園による違いはあっても、担任を含めた協力園の保育者が、活動の流れを見極めながら、必要なところで、子どもの援助を行っていたことが、スムーズに長時間の多様な活動をこなすことをかなり支えていたと思われる。この点から見ても、幼児期の教育活動として展開するためには、幼児教育の視点でねらいや内容を選定し活動計画を作成することの重要性や、実際の活動の実施においても、子どもの実態を把握しながら子どもに合わせた活動を展開できる力量をもった指導者がかかわることの必要性も見えてきた。この点については、どこでどのように行うのかという開催の仕方についての課題にも関連してくるが、この度は、子どもが実際に通っている園を会場とし、また、親子での参加を前提としたため、休日である土日の設定での開催となった。そのため、園のクラス

の子どもも参加する活動として担任をはじめとする関係職員が、休日にもかかわらず、ボランティアで協力することとなった。保育者がかかわることで保護者も安心して参加でき、また、個々の子どもへの必要な援助を担うなど、活動の展開での働きは、その必要感も含め多分にあったが、園長など職員を管理する立場や園の運営の視点から見ると、休日の職員の勤務をどう考えるか、あるいは、園の教育活動としてどう位置づけるのかなど、園として引き受ける活動としての課題が多々表れてきた。実際には、今年度の試験的な取り組みということで、各園とも協力的な対応であったが、今後のプログラムを継続していくことや、市のサービスとして選択できる活動としてあった場合にどのように園の教育活動に取り入れていくことができるのかなど、実際には、具体的に考えるべき課題が多方面にあることも示された。

②に関してのもう一つの面として、保護者も一緒に参加する活動として展開したプログラムの中で浮かび上がった課題がある。幼児期は特に、保護者の意識や活動に対する姿勢が、子どもに大きく影響する。この点から保護者の国際教育への意識や興味・関心に関する現状を把握しながら、保護者への理解と意識の啓蒙が求められていることや、保護者自身も多様な世界に触れる機会があることも、子どもにもつながるものとして有効であることとして確認された。実際の活動でも、活動の回数を重ねる度に、保護者も留学生に対して親和的になったり、保護者自身が異文化に興味や関心をもち積極的に活動に関わったりなど、子どもの活動への理解も含め、活動に対して能動的に変化している姿として表れている。

③の留学生の参加にかかわる点について、この度の活動で、特に興味深い成果として、留学生自身がこの活動への参加について、留学生の自分たちのためのイベントという意識をもっていったことがあげられる。途中からそれらの生かそうとして動いていったという活動の実践者のつぶやきにもあるように、留学生としてのアイデンティティを活かしながら、留学生にとっても学びのある活動として参加できるように、活動の中での役割が明確にあり、事前指導などを通して、準備も含めやること分かるようにすることなど、主体的に活動に参加できるように計画的に進めることの必要性が確かめられた。実際にも、回を重ねて参加している留学生が、交流の時間に必要な自国の生活を紹介するための具体物を自発的に準備するなどの姿にも表れている。またこれらは、振り返りにもあったように、多くの留学生が感じていた幼児期の子どもへ関わることへの不安に対する対応にもつながると考えられる。そのためにも、留学生に対応する窓口や指導者をどのようにするのかということも今後の重要な案件である。

④では、市の行政と地域のresourceとの連携や活用の方策を含めたこの企画の恒常性についての課題が上がってきた。この年のみのイベントではなく、公共のサービスとして、幼児期からの国際教育の機会を保障するためには、例えば、いろいろな幼稚園や保育所が希望すれば利用でき、園の計画にも入れられるといった安定したシステムが確立されていくことが必要となるだろう。そのための課題として、振り返りにもあるように、財政的な面も含め、活動を実施する人材等の地域の人的資源の確保や連携の体制作りなど、活動を続けていくためのシステムを作っていくことが必須であると思われる。

おわりに

国際化する社会の中で、求められるであろう力の検討も行いながら、これからを担う子どもたちへ、その教育の機会を開く試みとして、市の行政が関わりながら開催した幼児期からの国際理解教育ワークショップについて考えてきた。行政だからこそ保障できる部分と、留学生を含む地域のもつ人的資源と連携しながら行う活動の在り方など、ある程度、今後の実践への具体的な方策も見えてきた。その中でも、特に、幼児期の子どもから保護者も含め、世界に開かれる意識をもつことの大切さや、なんらかのコミュニケーションができて、初めて異文化交流、英語教育になっていく方向など、活動の中で浮かんだテーマは、国際社会や国際教育をどう考えていくのかなど、これからの様々な教育現場でも共有できる視点が得られたのではないかと考えている。多様な人が共に居るといふ社会に対するイメージをそれぞれにどのように持ち向き合っていくのかということから問われてきている。こうした問への見通しも含め、今後の活動についても引き続き、検討を重ねていきたい。

付記

本稿は、Y市の受託研究として行った調査研究に基づき、その成果としてもまとめています。

参考・引用文献

- ・齋藤都・佐治伸郎・廣田昭久 2017 認知科学24 (3) p376-394 幼児の類推における自発的言語化の効果
- ・城一道子 2013 教育総合研究：江戸川大学教職課程センター紀要 第2号p17-25 幼児期・児童期における早期英語教育の在り方—小学校外国語活動で身に付けられるコミュニケーション能力に関する考察—
- ・高橋順子・首藤敏元 2006 埼玉大学教育学部附属教育実践総合センター紀要(5) p185-195 タイの幼児教育—タイと日本の保育者による協同の保育の試

みー

- ・原知子・伊東英 2010 岐阜大学カリキュラム研究 vol.28 no.1 p1-11 就学後の継続・発展につながる就学前英語教育の進め方—Graded Readingの導入と効果

注

- 1) 中央教育審議会「21世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）」（平成8年7月）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chuuou/toushin/960701.htm 最終確認2018.9.28
- 2) 「初等中等教育における国際教育推進検討会報告～国際社会を生きる人材を育成するために～」（平成17年8月3日）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/026/houkoku/attach/1400589.htm 最終確認2018.9.28
- 3) 文部科学省 国際教育推進プラン
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/plan/index.htm
- 4) ベネッセ総合研究所 次世代育成研究室 第1回幼児教育・保育についての基本調査2007 幼稚園編
https://berd.benesse.jp/jisedaiken/research/pdf/research05_3.pdf 最終確認2018.9.28
- 5) ベネッセ総合研究所 次世代育成研究室 第2回幼児教育・保育についての基本調査 2012
https://berd.benesse.jp/up_images/research/research24_pre1.pdf 最終確認2018.9.28